

歴史雑感

中島 勇

私は定年退職し、旧・三和町教育委員会の社教指導員として再スタートし、歴史講座の係りを担当させて戴いた。

そして、ここ三和町内には、驚くほどの多くの歴史の痕跡が眠っていることを知った。そこには古代の縄文・弥生の遺跡、石鍋遺跡を初め、カクレキリシタン、台場跡、城址、明治維新時の廃仏毀釈の遺品、長崎の抜け荷街道と言われた「みさき道」等々がある。それで、私はすっかり歴史にはまってしまった。

しかし、歴史の研究はすんなりと通してはくれなかった。

野母半島の領主は、鎌倉時代に関東の房総半島の深堀の地から、地頭職として下ってきた三浦深堀氏である。戦国時代はその十八代に深堀純賢がいる。純賢は、諫早の西郷氏の出である。西郷氏の三男坊であったため雲仙のお寺に修行僧として出されていたのを還俗させられ、夫を離別して有馬へ追いやった女当主の十七代深堀真法の娘の融芳の入り婿となつて十八代を継いだ人物である。

深堀氏を継いだ純賢は、野母半島からの飛躍を目指して、当時ポルトガル貿易港として、莫



三和史談会の集い(筆者、左端)

馬の使者皆殺し事件は、沖田暉の戦いの前年のことである。これには全く息を呑んだ。これだつたら純賢は別に奇抜なことをやったことではない。龍造寺勢優勢な世の中で忠義を尽くしただけのことである。純賢は当たり前の武将であつたわけだ。

そして、見てきたことのように、全くのでたらめを書いている古文書には、よっぽど用心しなければならぬということを知った。

次に「みさき道」の研究で、江戸期の長崎港防備体制を調べたことがある。当時は異国船が近づいて来ると、野母半島突端の権現山見張り番所であり早く見つけ、今の長崎歴史博物館がある処にあつた立山奉行所まで知らせる体制があつた。旗竿を掲げて、それを小瀬戸の見張り番所が望遠鏡で確認するのである。そのコースが歴史の定説となつていた。

ところが、野母権現山の展望所から小瀬戸番所を見ても見えない。そこで私は双眼鏡を買ってきて覗いてみたが、途中にある香焼の高岳の樹木がじゃまで小瀬戸が見えないのである。不思議なこともあるものだと思ひながら数年経つた。

ある日、パソコンで九大工学部の図書館発信の「長崎港の警備体制」という図版に出会つた。すると、そこには野母から直接・小瀬戸ではなく、まず、すぐ隣の高島に行き、また伊王島に行つてから小瀬戸へと迂回して繋がれていた。図版にはくわしく説明が付されていた。最終地点も立山奉行所ではなく、すべて現在の県庁の地にあつた西役所が司令塔になつていた。それは確かに、現実性と即応性に優れていると思われた。

これは、文化五年(1808)に起きたフェートン号事件以降、警備体制が大きく変わつていたのである。

定説も、用心に越したことはない、ということを知つた。歴史に出会つて、幾つかの雑感を述べたが、最後にもう一つ、歴史がきれいなものではないかと思うのである。それは、歴史の基本になつているのが全ては文書資料からきているからだ。これを補充するものとして、考古学や伝承・伝説、あるいは科学を駆使しての分析等があることを知つた。しかし、それをいくら駆使しても、人間の「飽く無き生き様」を描ききれぬものではない。

昨今は、これで程よく納まつているのかな、と思うようになった。

(三和史談会 会長)

大な富を築きつつある長崎の地を執拗にねらつた。

一五八四年、西九州の大半を制した佐賀の領主・龍造寺隆信は、島原半島の有馬氏を討つため大軍を発し、沖田暉で戦っている。この時龍造寺氏の旗下にあつた深堀純賢も参陣。圧倒的優勢が伝えられていた龍造寺軍が、薩摩の助成を受けた有馬軍に、あつけなく大将の隆信が討ち取られ、龍造寺軍は大敗北。純賢は命からがら深堀に逃げ帰つていく。

ここで、問題の「九州治乱記」が登場する。この古文書の資料的価値は、かなり高いと評されている。そして、この古文書は語る。

この沖田暉の戦いの数ヶ月後、有馬より深堀に使者がやつてきて言うには、「この度の戦いでは敵・味方に別れたが、お主は元々、有馬一門ではないか。早く戻つてこい。」という和平工作であつた。

その使者一行を迎え入れた純賢は、蚊焼のすぐ沖にある無人島の「ほげ島」に巧みに誘い込んで、皆殺しにしてしまった。

そして、有馬氏一行十五人の首を、龍造寺隆信の亡き後、佐賀藩当主となつた鍋島直茂の元に送つた。直茂はこれを見て、「敗戦後、半年も経つていないのに、有馬一門の首を見ることができると、こんな嬉しいことはない。」と喜んだ。

この「九州治乱記」を読んでみると、沖田暉の戦いの後、長崎は薩摩勢によつて占領されている。このような時の純賢の行為は暴挙そのものである。純賢という人物を考えるに、よほど胆の座つた名将の器なのか、また、龍造寺氏からそれほどまでに恩を受けていたのか。一方有馬氏と深堀氏とは、のつびきならないほど深刻な状況があつたのかと、あれこれ思ひ悩んだ。夏の一日、私は小船を借りて「ほげ島」に渡り、すすきの生い茂つた小島を巡りながら考えるのであつた。

それから数年経つた頃のことである。ルイス・フロイスのバチカンに送つた書簡集を読んでいた時、ふと一文に眼が留まつた。「深堀純賢の有

風信

○今年最後の風信となり、今回は三五三号との由、今年もまた色々の事がありましたが、私共主催で毎週開講して参りました月曜講座、火曜古文書研究会、水曜懇話会、金曜食文化サークル、全てに亘り無事開講できたこと、之れ偏に皆様方より御よせ戴いた御協力の御陰と深く感謝いたしております。

○さて、十一月の行事で第一の行事は、「ここ三十年來かわる事なく長崎文化史を主題にして研修旅行を企画して下さる名古屋の椋山女子園高校の皆様への対応でした」と、それぞれのコースを担当して下さつた本会会員有志の皆様方の報告であつた。

○次に私は、前号「ながさきの空」で「長崎歳時記」をひき、長崎年中行事を記した中で「冬至の事は十二月号に記す」と言つてゐる。その冬至とは旧暦二十四節氣の一つで「一年中で昼が一番短い日」であり、その日を境に昼の時間がわずかず長くなるのであるが、この冬至を過ぎると一番さむい小寒・大寒が来るので注意せねばならぬ意もこめられてゐると記してある。

○その冬至は旧暦十一月二十八日であり、現在暦では十二月二十二日(木)に当る。この日を長崎では「一陽来復の日」と言い寒羽・張飛・元徳の画像を床にかけ、供物をなし汁粉・善財餅を作り親戚にも配る」とある。広川懈の「長崎聞見録」には唐人屋敷内ではこの日に大いに祝つた事が記してあり、「この日長崎奉行所へ官人年始の如く朝服にて参内拝賀す」とも記してある。又、子供達は小さな唐船を造り銅羅などをならし家々を廻るとある。

○長崎歳時記の十二月行事は、一日の「川渡り餅」の行事に始り、「すすはらい」十三日の「節季候」より新年をむかえる各種の行事の事が記してある。「餅つき」は二十二日より二十八日まで。柱餅は忘れぬように。二十四日は酒を飲む事禁止の日。二十八・九日、家に松飾をなす事、この日、両親方に鏡餅・塩鯛を贈り、手がけ、幸木を用意し、暮の大掃除・供餅をなし、晦日には運氣そばを用意し、へぎに塩をもち、諸神・恵方・佛前・浴室・厠に至るまで燈火をかかげる事。かくて翌朝の雑煮の具六品を用意し申にぬぎ、だしを煮て用意す。重肴・屠蘇酒等も用意の事。雑煮は餅の他・具六品水菜・スルメ・大根・コンブ・牛蒡・南京芋)

○大晦日には菩提寺に行き「除夜の儀式」に参加し、百八の鐘を撞かせて戴き、百八の煩惱を拂い、清らかに新年を迎え、其の足で長崎三社の「初まり」に行かれるとよい。

○皆様 よき新年を御迎え下さいませ。

(編集員一同)

